

俺様御曹司は義妹^{いもうと}を溺愛して離さない

プロローグ

「ようやく人心地つけたな、小春」

私、大神小春の傍らに立つ男性がため息混じりに呟く。彼はフルートグラスを傾け、黄金色のシャンパンで喉を潤した。

「お疲れさまです」

私は苦笑し、彼があつという間に空にしたグラスを受け取る。

ここは東京都内にある某高級ホテルのボールルーム。今日はこの広間で、とある大企業の会長の喜寿を祝うパーティーが開かれていた。

豪華なシャンデリアの下、着飾った老若男女が極上の料理と酒を味わい、談笑している。その煌びやかな会場の片隅で、私と彼は招待客達の姿を眺めていた。

「なあ、そろそろ帰ってもいいだろう？」

パーティーの主役と取引先、知り合いへの挨拶は済ませた。もう十分役目は果たしているし、せっかくの料理と酒を楽しもうにも、女性達の化粧と香水の匂いがきつくて味わうどころじゃない。苦虫を噛み潰したような表情でそうぼやく彼を、私は「いやいや、もう少し頑張りましょうよ」

となだめる。

彼の言う化粧や香水の匂いは、何も会場中に広まっているわけではない。ただ、先ほどまでたくさん女性の間に囲まれては逃げ、囲まれては逃げるを繰り返していた彼は、すっかり鼻がまいつてしまったのだらう。今だって、若いお嬢様方に捕まっていたところを「仕事の連絡が入ったので」と嘘をつき、抜け出してきたばかりだ。

こうなることはあらかじめ予想できていた。そう思いながら、私は隣に立つ彼——兄であり、上司でもある大神勇斗を仰ぎ見る。

百八十センチを超す長身、スポーツで鍛えられた逞しい肉体にオーダーメイドのスーツを纏い、姿勢良く凛と立つ。彼は身内の鼻屑目を抜きにしても野性的でとても男らしく、精悍だ。普段は下ろしている濡れ羽色の前髪を、今夜は整髪剤で軽く後ろに流し額を露わにしているのが、妙に色っぽくて様になってる。

光沢のあるネイビーの生地で誂えた、クラシカルなスリーピーススーツがまたよく似合っていて、俳優やモデルと言われても納得できるほど格好良い。

おまけに名家の三男坊で、若くして一流企業の常務取締役就任したエリート。かつ独身とくれば、会場にいる女性達がわらわらと寄ってくるのも道理だらう。

彼と話したがっている招待客は女性だけではない。ビジネスでもプライベートでも、彼と繋がりを持ちたいと考える人間はたくさんいるのだ。

だから彼は、昔からこういう場に参加することを苦手としていた。本人曰く、自分が鯉の餌になつたような気がして嫌だし、面倒なのだそうだ。自分に群がる女性達を鯉と称する感性はさておき、苦手と言いつつも本心を綺麗に隠し、如才ない笑顔と堂々とした態度で相手を上手くあしらうのだからすごい。未だこういう場に慣れず、緊張してしまう自分とは大違いだ。

(本当に、私がパートナー役でよかったのかな……)
兄の専属秘書を務めている私は、今日は仕事としてパーティーの同伴を仰せつかっている。彼に恥をかかせないよう、『派手すぎず、されど地味すぎず』を心がけ、自分なりに精いっぱいドレスアップしてきたつもりだけど、どうだろう？

彼のスーツに合わせて選んだネイビーのドレスはマーメイドラインで、オフショルダー風のエレガントなデザインが気に入っている。胸元をレース生地で覆う形のドレス本体は無地でシンプルながらも、レースの花模様華やかさを演出していた。

だが服は素敵でも、それを纏う私の容姿は平々凡々。パーティー仕様でいつもよりお化粧に力を入れたとはいえ、彼と釣り合っていないのでは？ と、心配は尽きない。

このドレスは本当に自分に似合っているのだろうか。やっぱり、着慣れたスーツ姿の方が無難だった？

ううん。そもそもパートナーは私ではなく、もっと場慣れたベテラン秘書にお願いした方がよかつたのかもしれない。……と、今更の不安が次から次へと湧いてくる。

(はあ……)

そんな気持ちで自分のドレスのスカートを見ていたら、彼が呆れた顔で、「まだ不安がつているのか」と言った。

「う……、だって……」

「そんな心配しなくても大丈夫だ。よく似合ってる」

そう言つて、彼はサイドを編み込んでシニヨンにした髪型が崩れない程度に、私の頭をぼんぼんと叩く。

「ゆうちゃ……」

つと、いけない。ついいつもの呼び方が口から出かけたが、今は仕事だと改める。

「ありがとうございます、大神常務」

「おう。というわけでお前のドレス姿も堪能したことだし、帰るか」

（あはは……。結局、行きつくところはそこなんだね）

やたらと帰りがる上司に苦笑して、私は「仕方ありませんね」と頷いた。

先ほど彼がぼやいていた通り、必要な相手への挨拶は全て済ませてある。できればパーティーの終わりまでいてほしかったけれど、当人がこれほど嫌がつているのだから、だからと居座り続けるのはストレスが溜まるだけだ。

（今日は、女性の参加者がやけに多かつたし）

大勢の女性達に話しかけられるという、普通の男性なら喜びそうなシチュエーションも、彼にとつては面倒でしかなかつたらしい。

かくしてパーティーの途中で帰ることを決めた私達は、主催者に一言声をかけようと、相手の姿を捜した。

すると目当ての人物とは別の相手が、こちらに気づく。

「大神くん！　なんだ、こんなところにいたのかね」

見事な太鼓腹を抱えた中年の男性が、笑みを浮かべて近づいてくる。隣には、ピンク色の可愛らしいドレスを着た若い女性がいた。年齢や顔立ちからして、彼の娘だと見当がつく。

「……誰だ？」

相手に聞こえないよう小声で尋ねる彼に、私も声をひそめて答えた。

「水川商事の水川社長とのお嬢様です。うちとは直接取引はありませんが、以前別のパーティーでお言葉を交わされましたよ」

しかし彼は「覚えてないな」と、あっさり言い捨てる。

まあ、無理もない。そういう相手は数えきれないほどいるし、いちいち覚えていられないだろう。そのために秘書である私がついてきたのだ。今日の招待客のデータは、全て頭に叩き込んである。せめてこれくらいは役目は果たさなければと、私は彼に相手の情報を伝えた。

「水川社長とは、前回ゴルフの話で盛り上がり上がっておられました。ちなみに、お嬢様とお会いするのは今回が初めてです」

小声で言い終えたタイミングで、水川社長とお嬢様が目の前で足を止める。

「久しぶりだねえ、大神くん。よかつた、君に会いたいと思つていたんだ」

「お久しぶりです、水川社長。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

さつき「覚えてない」と言っていたのが嘘のように、彼は親しげな笑顔と丁寧な口調で水川社長の相手をした。

「いや何、君は人気者だからね。今日も女性陣に囲まれていただろう？ 見ていたよ」

はっはっはと鷹揚に笑いながら、水川社長は自分の娘を彼に紹介する。

「私の長女で、麻衣子というんだ。今年二十歳で、都内の女子大に通っている。君にぜひ紹介したくて、連れてきたんだ」

「はじめまして。水川麻衣子と申します」

綺麗な黒髪をふんわりと結び上げたその女性はぺこりと頭を下げると、頬を赤らめてじいっと彼を見つめた。

兄の容姿は、うら若き乙女の心がかっちり掴んだらしい。

「綺麗なお嬢様ですね、水川社長。はじめまして。大神勇斗と申します」

彼はにっこりと笑みを浮かべると、ついで私を麻衣子さんに紹介した。

「彼女は私の秘書で」

「はじめまして。大神の秘書を務めております、大神小春と申します」

「え、大神……？ もしかして、お二人はご夫婦なのですか？」

私達の苗字が同じだから、麻衣子さんは咄嗟にそう連想したのだろう。

「いえ、小春は……」

「麻衣子、彼女は大神くんの妹さんなんだよ。確か、今年から大神くんの専属秘書になったんだってね」

言いかけた彼に代わって答えたのは、水川社長だった。

「はい。今は兄の下で勉強させてもらっています」

「ええっ、ご兄妹なんですか!？」

麻衣子さんは目を見開き、信じられない……と言いたげな表情を浮かべた。

こういう反応には慣れている。野性的な美形の兄に対し、凡庸な容姿の妹。私達はまったくいっていいほど似ていない。

だって、私達は……

「びっくりです。全然似てないんですね」

麻衣子さんは私の方を見て、くすくすと笑った。

その笑顔には、わずかながらも嘲りの色が滲んでいる。

(あはは……)

このお嬢様、見た目は清楚で可愛いけれど、なかなかいい性格をしているらしい。

「こら、失礼だろう麻衣子」

水川社長も言葉でこそ娘をなだめたものの、その顔は笑っていた。

「いいんですよ。似ていない兄妹だとは、よく言われますので」

そう彼がとりなすと、水川社長は「ははは」と笑い声を上げ、私に視線を向けた。

「似ていないのは当然だ。何せ、彼女は——」

「……っ」

「小春」

水川社長が言うのを遮り、彼が私の名を呼ぶ。

「悪いが、飲み物をとってきてくれないか。シャンパンをもう一杯頼む。水川社長とお嬢様もいかがです？」

「あ、ああ。じゃあ、私も同じ物をお願いするよ」

「私はグレイプフルーツジュースがいいです」

「かしこまりました。少々お待ちください」

一礼し、私は足早に彼らのもとを離れた。

兄はたぶん、用を言いつけることで、私をあの場合から逃がしてくれたのだろう。

「はあ……」

水川社長がさつき言いかけたことは、おそらく私の出自についてだ。

別段隠してはいないが、人が大勢いる場所で、あんな風に笑いながら話されたくはない。兄の気遣いは、ありがたかった。

（シャンパン二つと、グレイプフルーツジュース一つ……だったよね）

近くにスタツフの姿がなかったたので、飲み物が置かれているテーブルに私が直接向かう。

今日のパーティーは立食形式で、そこかしこに料理や飲み物を並べたテーブルがあった。会場の

端には歓談用のテーブルセットがいくつか設えられている。

他にも、商談のためのボードルーム、いわゆる会議室を上階に二部屋ほど押さえてあるのだとか。

さすが、日本有数の大企業。会長の喜寿祝い一つに、えらい気合の入れようだ。

あまり食べられなかったけれど、少しでも口にしたお寿司もお酒もすぐく美味しかった……と思いつつ目当てのテーブルに行き、持っていた空のグラスを戻す。ついで、小さめのトレイにシャンパンのグラスを二つとグレイプフルーツジュースのグラスを一つ載せた。

「おお、小春ちゃんじゃないか」

（うっ。こ、この声は……）

背後から聞こえてきた声に、嫌な予感を覚えてつつ振り向く。そこには、趣味の悪いスーツに身を包んだ中年の男性が立っていた。

脂ぎった肌に、ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべる分厚い唇。彼はどこことなくガマガエルを髣髴とさせる。

「源田専務……。専務も、飲み物をお求めですか？」

この男性はうちの会社と取引のある企業の専務で、私と何度か接待や契約の場などで顔を合わせたことがある。今日のパーティーでも、すでに挨拶を済ませていた。

「ああ、ワインを取りに来たんだ。うちの秘書は小春ちゃんと違って気が利かなくてねえ、何度言っても間違えて持ってくるから、自分で足を運ぶことにしたんだよ」

「そうなんですネ」

愛想笑いを浮かべて相槌を打ちつつ、私はさりげなく源田専務と距離をとった。

この人は、秘書達の間で密かに『セクハラガエル』とあだ名されるほどのセクハラ常習者なのである。うちの女性社員が何人も被害に遭っているし、かくいう私も過去に何度かお尻を触られたり、遠回しに枕営業を求められたりしたことがあった。

部下に対する態度も横柄で、いつも無理難題を秘書や部下に押しつけるせいで、会う度に同伴者の顔が変わるといっては有名な話。

つまり、一対一ではなるべく会いたくない相手だ。

(秘書が飲み物を間違えるっていうのも、指示通り持ってきたものに「自分が言ったのはこれじゃない」「お前の聞き間違いだ」とか言って、いちゃもんつけてるだけなんだろうなあ)

源田専務付きになってしまった秘書に同情を禁じ得ない。あの会社も、どうしてこんな問題のある人間を重役に据えているのか。

「いやあ、さつき会った時もあったけど、今日の小春ちゃんは一段と可愛いねえ。やつぱり若い女の子はいいなあ。特に、小春ちゃんみたいに胸の大きい子、おじさん大好き」

(ひえ………)

人の胸元をじろじろ嘗め回すように見ながら言う源田専務に、嫌悪感が湧く。

うん、ここは早く退散しよう。

「大神が待っておりますので、私は失礼いたしますね」

「まあまあ、もう少しいいじゃないか」

(げっ)

立ち去ろうとした私の腕を、源田専務がはしつと掴む。

汗ばんだ手に触れられて、ぞわつと鳥肌が立った。

「実はね、小春ちゃんに会社にまた新しい仕事をお願いしようと思ってるんだ。その話、聞きたいだろうか？」

「そ、そういうお話でしたら、常務の大神も交えて……」

というか、そんな話があったならさつき挨拶した時に口にしていたはずだ。どうせ嘘に決まっている。

「いやいやいや！ おじさんはまず先に、小春ちゃんだけに教えてあげたいんだよ。ね？ いいですよ？」

私の腕を掴んでいた手が、今度はさりげなさを装って背中、そしてお尻に回った。

(ちよっ………！)

「やめてください、源田専務」

「ん〜？ 声が小さくて聞こえないなあ」

(こ、この、セクハラ親父！)

大声を出さなかったのは、こんな場所で騒ぎを起こしてはお互いに困ると思つてのことだ。

そもそも、取引先のパーティーでよその会社の秘書にセクハラ行為を働くだなんて、何を考えて

いるのか、この人は。

「お願いですから、放しっ——」

「おや、源田専務じゃないですか」

なんとか源田専務から離れようとしたその時、聞き慣れた凛々しい声が割って入ってきた。「お、大神くん……」

水川父娘と談笑していたはずの兄がにっこりと笑みを浮かべ、源田専務の顔を一瞥する。

その表情は、口元こそ優美に弧を描いていこそすれ、目はまったく笑っていない。

「うちの小春に、何かご用でも？」

丁寧な口調ながらも凄みのある声と鋭い眼光に気圧されたのか、源田専務は慌てて私から身を離すと、「いや、いやいや、す、少しおしゃべりしていただけだよ」と言つてこの場を後にした。

目下の相手にはとことん横暴に振る舞う源田専務も、取引先の重役であり、名門一族の御曹司である彼には弱いらしい。

「……つたく、あのスケベ親父が」

その後ろ姿にチツと舌打ちをし、兄が小声で悪態をつく。

そして私を見て、「ちよつと目を離すとすぐこれだ。おい小春、今すぐ帰るぞ」と言つた。

「えっ、でも、水川社長とお嬢様は？」

「会社から急な連絡が入つたつて言つて抜け出してきた。問題ない」

私が離れたあと、彼は予想通り水川社長に娘さんとの縁談を打診されたらしい。

当たり前障りのないよう断つても食い下がられ辟易していた時、私が源田専務に絡まれているのに気づいた。そこで適当な言い訳をでっちあげ、水川父娘と別れて助けに来てくれた……と。

「ありがとう。でも、迷惑かけてごめんなさい」

自分がつつと毅然と対応できていたら、兄の手を煩わせることもなかっただろう。

秘書として彼をサポートするために同伴したというのに、逆に手間をかけさせてしまつて、申し訳ない。

そう落ち込む私に、彼は「俺こそ、お前を一人にして悪かつた」と謝る。

「ゆうちゃん……」

「……呼び方。まだ仕事だろう」

ふつと笑つて咎めるその声は温かくて、私を見る瞳も表情も優しくかつた。

「あつ、ご、ごめんなさい」

私は普段、兄のことを『ゆうちゃん』と呼んでいる。

だが、彼の言う通り今はまだ仕事だ。

「失礼いたしました、大神常務」

「ああ。それじゃ、主催者に挨拶してここを出るぞ」

「はい」

兄にエスコートされ、主催者のもとへ向かう。

そこで途中退席する失礼を詫びた私達は、そのまま会場のホテルを後にした。

(また、ゆうちゃんに助けられちゃったなあ……)

私はもうずっと、それこそ初めて出会った時から、彼に守られ、助けられてばかりだ。ちよっと口の悪いところもあるけれど、優しくて頼りになる上司であり、格好良くて自慢の兄でもある、ゆうちゃん。

私とはかけらも似ていない、私の……大切な家族。

水川社長が言っていたように、私達が似ていないのは当たり前のことだ。

だって、私は彼の本当の妹じゃない。

私達に、血の繋がりはないのだから……

☆ ★ ☆

私、大神小春は、本当の親が誰かもわからない元捨て子だ。

初冬の、穏やかな春に似た日和が続く時節に生まれたから『小春』と、そう名付けてくれた今の両親が実の父母ではないと知ったのは、物心ついたころ——確か、幼稚園の時……だった気がする。世間では、親や姉が「お前はうちの子じゃない。実は橋の下で捨てた子なんだ」と言つて子どもを脅かしたりすることがあるらしいが、我が家の場合は冗談にならないからか、家族にそんな言葉をかけられたことはない。

まあ、私は橋の下ではなく森で拾われた子どもなんだけれど。

私は生後間もないころ、大神家が所有する別荘近くの森に捨てられていたのだそうだ。

白いおくるみに包まれ、木の根元で泣いていた私を見つけてくれたのは、この時たまたま家族と別荘に滞在していた大神家の三男坊、大神勇斗——ゆうちゃんだった。

当時五歳だったゆうちゃんは、朝方、家族の目を盗んでこっそり森へ探検に出かけていたらしく、すると、木立の奥から泣き声だったので、猫でもいるのだろうかと思つて探してみたら、人間の赤ん坊……つまり私が転がっていた、というわけ。

どんな事情があつて別荘地の森に捨てられたのかはわからないけれど、この時彼に発見されていなければ、私は人知れず命を落としていただろう。

そして幼いゆうちゃんは、私を抱えて別荘に戻った。

突然赤ん坊を抱いて戻ってきた三男坊を見て、家族はパニックに陥つたという。まあ、五歳児がどこから赤ちゃんを連れてきたのだから、そりゃあびつくりするよね。

そんな中、彼は私を「こいつは俺が見つけた。だから俺のものにする！」と言い張つて放そうとせず、「赤ちゃんを渡しなさい」と迫る大人の手から逃げ回つたと聞いている。

とはいえ、所詮は五歳の子ども。すぐに捕まつて赤ん坊を取り上げられた。

他の家族は「俺のもの……」と呆れていたそうだけど、この話を聞いた時、私は嬉しかった。私はゆうちゃんのものだからこれからもずっと傍にいていいんだ、って。そう思えたから。

その後、私はゆうちゃんの強い希望もあり、また私を捨てた人物も肉親も見つからず他に引き取り手もいなかったことから、大神家に養女として迎えられた。

私はとても幸運だ。

『小春』という名前を与えてくれた大神家の両親は、私を実子と分け隔てなく深い愛情を持って育ててくれたし、上の兄二人も年の離れた妹をとて可愛がってくれた。

父方の祖父母だって、躰こそ厳しかったけれど、それは兄達に対しても同じだったし、差別することなく本当の孫のように接してくれたのだ。

私を見つけたゆうちゃんも、少しばかり乱暴で俺様気質なところはあったものの、根は優しく面倒見が良く、何くれとなく私の世話を焼いてくれた。

私はそんなゆうちゃんのことを大好きで、小さいころからずっと、彼の背中ばかり追いかけていたように思う。

家族はみんな、私に優しい。

私を家族として、温かく受け入れてくれた。

もつとも、捨て子であった私を快く思わない人達は、周りにたくさんいる。

私が引き取られた大神家は古くから続く名家で、複数の会社を傘下に収める大企業の経営者一族でもある。

そんな一族の本家に、どこの馬の骨とも知れない娘を養子として迎えるなんてとんでもないと、反対する親戚は多かったそうだ。

祖父母や両親の手前、あからさまに言われることこそなかったとはいえ、家族の目の届かないところで意地悪されたり、嫌味を言われたり陰口を叩かれたり……なんてのはよくあることで。

だから私は、両親から事情を説明されるより早く、物心つくころにはすでに自分が捨て子で、家族とは血が繋がっていないのだと自覚していた。

他の子ども達が当たり前のように持っている家族との血縁——確固たる繋がりを、私だけが持っていない。

それは私にとって、今も昔も変わらない最大のコンプレックスだ。

親戚だけでなく隣近所でもこそそこそ噂されて、幼いころはよくいじめっ子達に『捨て子』とか『もらわれっ子』とかと、からかわれたっけ。

そういう時、反論もできずめそめ泣くばかりだった私を助けてくれたのは、ゆうちゃんだった。私がかかわれていると、どこからともなくやってきて、いじめっ子達を蹴散らしてくれたのだ。今でも時折夢に見る。

あれは確か、私が小学校に入学して一月ほど経ったころのことだ。

最初は私の事情を知らなかった同級生も、うちの近所に住む子達の口から私が捨て子であること聞かされて、からかってくるようになっていた。

その日、私は当時六年生だったゆうちゃんと一緒に帰る約束をしていたため、昇降口近くで彼を待っていた。そこへ同じクラスの男の子達が近づいてきて、「お前、捨て子なんだってな」と言ってきたのだ。

ああ、またかと思いつつ無言で俯く私を小突いて、男の子達は笑いながら囃したてる。

『やーい、親なしっ子』

『親に捨てられるなんて、カワイソーなやつ〜』

『お前、いらぬ子じゃ〜』

『……っ』

意地の悪い笑顔で絡んでくる男の子達が怖かったし、面白半分にかかわられて、悲しかった。特に『いらぬ子』という言葉が、胸にグサグサ突き刺さったなあ。

自分は生みの親にとって『いらぬ子』存在だったから、捨てられたんだ。

迷惑をかけたなら、邪魔になったら、今の家族にも捨てられるんじゃないか。このころの私は、そんな恐れを漠然と抱いていた。

『うつ、うつ……っ』

『うわー、こいつ泣いてやんの！』

『泣き虫〜！』

たまらず泣き出した私を見て、いじめっ子達は笑う。

そこへ、ゆうちゃんが駆け寄ってきて――

『うちの小春をいじめてんじゃねー！』

って、一喝してくれたんだ。

『やべえ、六年の大神だ！』

『逃げる！』

当時、ゆうちゃんは六年生の中でも一番背が高く、体格も良かったから、怒ると迫力があつた。

その剣幕に気圧され、いじめっ子達は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

『次また小春に変なこと言ったらぶっ飛ばすぞ！』

ゆうちゃんは、慌てて走っていくいじめっ子達の背中に拳を振り上げて怒鳴った。

『うえっ、えっ、ゆ、ゆうちゃ……』

『お前もお前だ。あんなやつらに泣かされてんじゃねーよ』

『だ、だって……』

『だってじゃねー。ほら、帰るぞ』

『うう〜っ』

『……つたく、しょうがねえなあ。今日のおやつ、俺の分もちよつとお前にわけてやるから、いい加減泣きやめよ』

そう言つて、私の手をぎゅっと握ってくれたゆうちゃんの掌の温もりを、私は今でも鮮明に覚えてる。

彼はいつも、いじめられている私を助けてくれた。

周囲の心ない言葉に傷ついて泣いている私を、ぶっきらぼうな言葉で慰めてくれた。

ゆうちゃんは私の命の恩人で、頼もしい兄で、大切な家族で……

そして、私の大好きな人。

捨て子だ、養子だとあれこれ言われて、辛いことがないと言つたら嘘になるけれど、それでも

「私は幸せだ」と、断言できる。

今、私がこうして生きて幸福を感じていられるのは、あの日私を見つけてくれたゆうちゃんのおかげなんだ。

私はその恩に報^{むく}いたい。家族の——ゆうちゃんの役に立ちたい。そう一心に思いながら、私は今日まで歩んできたのだった。

—

まだまだ夏の気配が色濃い、九月のある朝のこと。

アラームが鳴る寸前、ぼちっと目を覚ました私は、枕元のスマートフォンを手に取り目覚ましアプリを解除した。

早起きが習慣になっっているので、いつもアラームが鳴るちょっと前に起きるんだよね。寝付きと寝起きがいいのは、密^{ひそ}かな自慢だ。

(……また、昔の夢を見ちゃった……)

覚醒^{かくせい}したばかりの頭に思い描くのは、昨夜見た夢のこと。小学生のころ、いじめっ子達に囲まれていたところをゆうちゃんに助けられた記憶だ。

あれから二十年近く経ち、私は再来月で二十六歳になる。

(子どものころのゆうちゃんも、格好良かったなあ……)

私は布団の中で、ふふっと笑みを浮かべた。

それから、小学六年生のゆうちゃんと夢で会えた喜びに浸^{ひた}りつつ、スマホで天気予報をチェックする。起きたら真っ先に天気予報を確認するのは、社会人になってからの癖^{くせ}だった。

(ええと……)

本日、東京都の予報は晴れのち曇り、降水確率は十パーセント。これなら傘はいらないな。予想最高気温は……うわ、高い。熱中症に気をつけよう。

九月に入ったというのに、関東地方はまだまだ暑い日が続いている。

「んんっ」

上半身を起こして、思いつきり伸びをした。

「今日も頑張るぞ」と気合を入れ、ベッドを下りる。

乱れた布団を軽く直してからウオークインクローゼットに入り、通勤着に着替え、寝室を出る。洗面所で顔を洗い、肩上で切り揃えた髪の毛の寝癖をちよいちよいと直したら、エプロンを身につけて朝食作りだ。

実家で一緒に暮らしていた祖父が「一日の元気は朝食で作られる！」という考えの人だったため、朝ごはんは毎日しっかり、たっぷり食べるのが大神家の家訓だ。

メニューは同居人の好みで、和食が多い。昨夜炊飯器をセットしておいたので、今朝も和食だ。

おかずは週末に作り置きした常備菜のきんぴらごぼうと、小松菜のお浸し。それから塩鮭を焼いて、明太子入りの出汁巻き卵を作る。お味噌汁の具は大根と油揚げ。

(あ、納豆もあるんだっ)

冷蔵庫から納豆のパックを取り出し、小鉢に移す。

出来上がった料理をダイニングテーブルに並べ、お茶の用意をして、準備完了！

(ん、時間もびったり)

そろそろ同居人を起こす頃合いだと、私は彼の寝室へ向かう。

現在住んでいるこの家は、通勤に便利な都心の高層マンションである。大神家が所有する物件の一つで、間取りは2LDK。

東京郊外に大きな屋敷を構える実家もかなり広いけれど、この部屋も二十五歳の小娘が住むには分不相応なほど広くて立派だ。

私は七年前から、この部屋で三番目の兄——ゆうちゃんと一緒に暮らしている。

私の大学進学を機に、当時社会人二年目だった彼が「通勤にも通学にも便利だし、実家を出るぞ」と、私を連れてここに引っ越したのだ。

一人暮らしじゃなくていいの？ 私も一緒にいいの？

そう思ったが、ゆうちゃんが「家政婦雇うの面倒たる」と言ったので、「ああなるほど、家事要員が欲しかったのか」と納得した。

私は昔から家事——特に料理が好きで、実家ではよく通いの家政婦さんの手伝いをし、色々教えてもらっていたから。

私としても、ゆうちゃんと一緒にいられ、彼のお世話をさせてもらえるのは嬉しく、否やはなかった。

事情を知った友達には、「血の繋がらない兄妹が一つ屋根の下に二人きり!? それ、大丈夫なの?」なんて言われたりもしたけれど、それこそ赤ん坊の時からずっと一緒に暮らしてきたのだ。

今更、ゆうちゃんを異性として意識することは……

……ないと言ったら嘘になる、かな。

命の恩人で、ずっと私を守ってくれて、誰よりも格好良くて頼りになる、ゆうちゃん。彼に対する気持ち、他の家族に向けるものとは違うものに変わってきていることに、私はかなり前から気づいていた。

私は、ゆうちゃんが好きだ。

そう、家族としても、異性としても。

つまり、私は血の繋がらない兄に恋愛感情を抱いてしまっている。

けれど、それを表に出してはいけない。

だってそんなことをしたら、きつと彼は困る。

私が中学生のころ、だったかな。ゆうちゃんが上の兄達に、「お前と小春って、本当に仲が良いよな」「将来は結婚するのか?」とからかわれている場面に出くわしたことがある。

ゆうちゃんはなんとも嫌そうな顔で、兄達に「そんなわけないだろ。あいつは妹だ。女として見てないし見れない」と答えていた。

私は、その時すでにゆうちゃんに淡い恋心を抱いていたから、シヨックだったなあ……

あと、心のどこかで「自分はゆうちゃんの『特別』なんだ」って、思いつがっていた気持ちに冷や水をかけられたような心地がした。

もしかしたらゆうちゃんと結婚できるかもしれないと、その可能性があるんじゃないかと驕っていた自分が恥ずかしくてたまらなかった。

でも、仕方ない。

私は彼にとって、妹であり、自分の所有物——子分みたいなもの。恋愛対象として見ていないからこそ、今もこうして一緒に暮らしてられるんだ。

その関係を、壊したくない。

「……………ふう」

私は未練がましく心に燻る想いをため息と共に吐き出して、頭を切り替える。

そして目の前の扉をコンコンとノックし、声をかけた。

「ゆうちゃん、起きてる? 朝ごはんできたよ」

……返事はない。

私はいつものことだと気にせず扉を開けた。

分厚いカーテンに遮られた薄暗い室内の、奥にドンと置かれたクイーンサイズのベッドの上、こんもりと盛り上がった布団の山がわずかに身動きする。

「ゆうちゃん?」

動きはあるが、応えはない。たぶん、まだ寝惚けているのだろう。

私は中へ踏み入って、バルコニーに面した掃き出し窓のカーテンをシャッと開く。

「……眩しい」

部屋の中が明るくなると、布団の山から不満げな声が漏れた。

(あ、いつの間にか顔だけ出してる)

「おはよう、ゆうちゃん。今日は晴れのち曇りだつて。朝からいいお天気だね」

「おはよ。……いい天気すぎて腹立つ。あー、今日も暑くなりそうだな。家から出たくない」

ゆうちゃんはぶつくさと文句を言いつつ、布団を押しつけた。

半袖のTシャツにゆつたりとしたハーフパンツを寝間着にしている彼は、「くああつ」とあくびをする。

(……っ)

その寝起き姿を見て、私は毎朝ドキツとしてしまふのだ。

まだ寝足りないとはかりに眠たげな顔はどこか稚くて可愛いし、Tシャツの襟元から覗く鎖骨が妙に色つばい。顎にうつすらと生えた髭さえセクシーに見えて、落ち着かない気持ちになる。

私は彼から目を逸らし、内心の動揺を誤魔化すように「今朝はゆうちゃんの好きな明太子入りの出汁巻き卵作ったよ。早く支度して一緒に食べよう」と言った。

「お、マジか。あれメシが進むんだよなあ。味噌汁の具は？」

「大根と油揚げ」

「よし。今日もメシ大盛りで頼むわ」

そう言いつつ、ゆうちゃんはベッドから下りてウォークインクローゼットに向かう。その途中、すれ違いざまに私の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

(わっ。もうっ、また……)

何かと私の頭を撫でるのは、ゆうちゃんの昔からの癖だ。

私的には、好きな人にかまってもらえるのが嬉しい反面、彼の中ではいつまでも子どものままなのかなあとさえ、ちよつと複雑だつたりする。髪もぐしゃぐしゃにされちゃうし。

私は乱れた髪を直し、ついでにゆうちゃんがいなくなったベッドをささつと整えてから、一足先にキッチンに戻った。

彼が着替えている間に、味噌汁を軽く温め直す。

ほどなく、味噌汁のいい匂いがふんわり広がっていった。

この、どこかホツとする匂い、大好き。

(朝はやつぱりご飯とお味噌汁だねえ)

私にとつてお味噌汁の匂いは、家族みんなで食卓を囲む、幸福な思い出の象徴でもある。

だからか、この匂いを嗅ぐと胸がぽかぽか温かくなるんだ。

(ゆうちゃんの分は大盛り……っ)

二人暮らしを機にゆうちゃんを買ってくれた、お揃いのお茶碗とお椀にご飯とお味噌汁をよそって、ダイニングテーブルへ。

そして二人分の緑茶を湯呑に注ぎ終えたころ、身支度を済ませたゆうちゃんがやってきた。

大神家御用達のテラーで仕立てたオーダーメイドのスーツに身を包み、まだネクタイを結んでないシャツの襟元をくつろげている。そんな彼は、さっきまでの気の抜けた姿とはまた違って、すごく格好良い。百八十センチ超えの高身長に加えて体格も良いため、スーツがよく似合うんだよね。

「お、納豆もある。でかした、小春」

「ふふっ。ご飯とお味噌汁のおかわりもあるから、いっぱい食べてね」

六人掛けのダイニングテーブルに向かい合わせで座った私達は、いつものように声を揃えて「いただきます」と手を合わせ、お箸を手に取った。

ゆうちゃんは私が作ったごはんを、今日も「美味しい、美味しい」と食べてくれる。

そんな彼を見ているだけで、気持ちがふわふわと浮き立った。

「……ん？ どうした、小春」

「ううん、なんでもない」

朝からもりもりとごはんを食べるゆうちゃんの姿に見入っていたなんて言えるはずもなく、笑顔で誤魔化す。

彼はそんな私のお皿から、「それ食べないなら、俺がもらうぞ」と、明太子入り出汁巻き卵を一切れ奪っていった。

「ああつ、酷い！」

食べないなんて一言も言っていないのに！

「はっはっは」

ゆうちゃんは無情にも、私に見せつけるように出汁巻き卵を口にする。

けれど、私がむっすーと顰め面をしたら、「冗談だよ、冗談」と自分の分の出汁巻き卵を一切れ、私の口元に運んだ。

「……っ」

「ほら、食べ」

（く、食えっ。だってこれじゃ、いわゆる「はい、アーン」ってやつで……）

わざわざ身を乗り出してまでこんなことしないで、普通にお皿に戻してくれたらいいのに！

どうしたものかと思っただけれど、再度ゆうちゃんに「ほら」と促され、私はおすおすと出汁巻き卵を口にした。

思いがけず好きな人に「アーン」をされて、心拍数が上がる。

「美味しいか？」

「……ん、美味しい」

そう答えたものの、本当はドキドキしすぎて、味わう余裕なんてなかった。

「だろう」

って、なんで作ってもいないゆうちゃんが自慢げに笑うかな。

（……でも）

そんな笑顔も可愛いとか、そういうところも好きだなあって思ってしまうあたり、私はだいぶ、彼にまいつているのかもしれない。

一度フラれているも同然なのに、血の繋がらない兄への恋心を未だ捨てきれないなんて。

（だめだなあ……、私）

朝食を終え、ゆうちゃんが食器を洗ってくれている間に、私は歯磨きをして、メイクを済ませる。

最初は、「洗い物も私が……」と申し出ていたのだが、彼が「これくらいやらせろ」と言っただけで済んだのだ。

家事要員として私を同居させている割に、ゆうちゃんは何くれとなく家事を分担している。水回りのお掃除とか、ゴミ出しとか。

ただ料理は苦手みたいなので、私は主に飯炊きとしての役割を求められているのだろう。なんてことを改めて考えつつ、自室のドレッサー前に座って化粧をする。

大きめの鏡に映るのは、美形揃いの家族とは似ても似つかない、平凡な顔立ち。

たとえ周りにあれこれ言われなかったとしても、この顔を見れば家族と血の繋がりがなくらい、いつか察しただろうな。

みにくいアヒルの子って、きつとこんな気分だったに違いないと思うことがしばしばだ。もともと、あちらは最終的に美しい白鳥に育つけれど、私にそんな成長は望めない。

家族の中で私一人だけ垂れ目だし。髪の毛だって、黒髪ストレートの家族とは違って色素が薄い焦げ茶色な上、少し癖がある。雨の日は、湿気でぼわっと広がって厄介だ。

体格も、百五十五センチと小さいくせに胸だけは育ってしまっただけで、バランスが悪い。友達からは羨ましがられるものの、胸元に布が引つ張られて服が綺麗に着られず、私にとってはコンプレックスだ。

「……はあ」

せめてもう少し綺麗な容姿だったなら、周りに色々言われずに済んだのだろうか。

そう思わずにはいられない凡庸な顔に、社会人として失礼にならない程度の化粧を施した。劇的なビフォーアフターを演出できるほどのテクニクは、私にはないのだ。

(……よし)

十五分ほどでメイクを済ませ、通勤用の鞆の中身をチェックして自室を出る。

リビングでは、洗い物を済ませたゆうちゃんがソファに腰かけて私を待っていた。

「小春、ネクタイ」

「はい」

面倒くさがりな彼は、いつも私にネクタイを結ばせる。

ソファから立ち上がったゆうちゃんの前に行き、手渡されたネクタイをしゅるりと首に巻きつけた。途端、彼の身体から香る爽やかな香水の匂いに、胸がキュンとする。

この時期に彼が好んで使う香水は、清涼感の中にかすかな甘さと男の色気を感じさせる逸品で、ゆうちゃんの魅力をより引き立てていた。

こうしてネクタイを結んであげる度に、まるで奥さんみたいだなんて……思ってしまう。

彼としてはなんてことない習慣なんだろうけれど、私は毎朝、胸から溢れそうになる恋情を隠すのに必死だ。

(私、顔赤くなったりしてないよね……？ 大丈夫、だよな？)

「……はい、できたよ」

「ん。じゃ、そろそろ行くか」

「うん」

上司と部下でもある私達は、もちろん出勤場所も同じ。

ゆうちゃんは大学卒業後、大神家が大株主を務めるグループ企業の中核会社に入社した。そこは私達の祖父が立ち上げた会社で、パソコンを中心としたOA機器の販売や、企業向けの情報処理システム、通信システムの開発と販売を行っている。

入社後、彼は一族の期待に応えて順調に功績を重ね、現在は三十一歳という若さで常務取締役の重責を担っている。

本家の三男坊だから重役になれたのだと色眼鏡で見る人もいるが、ゆうちゃんは身内の鼠目（ひきめ）を抜きにしても優秀で、上の兄達と共にグループを背負って立つ人物だ。

そして私も、捨て子だった自分を引き取り、何不自由なく育ててくれた両親の恩に報いたい。大好きな家族や、ゆうちゃんの役に立ちたいと思い、大学卒業後、彼と同じ会社に入った。

入社してしばらくは研修としてあちこちの部署を回り、その後希望通り秘書課に配属され、今年の春から常務であるゆうちゃんの専属秘書として働いている。

「ゆうちゃん、忘れ物ない？」

「ああ」

部屋を出て、向かう先はマンション地下にある住人専用の駐車場だ。通勤には電車ではなく車を使っている。

私達はゆうちゃんの愛車に乗り込み、会社へ向かった。

本来なら秘書の私が運転手を務めるべきなんだろうけれど、彼が「俺が好きで運転するんだからいいんだよ。お前は黙って隣に乗っとけ」と言って、ハンドルを渡してくれないのだ。

実際、ドライブ好きなゆうちゃんの運転はとても上手で、安心感がある。

「小春、今日の予定は？」

「ええと、十時から第三会議室で企画会議。十二時から営業部にてランチミーティング、昼食は月乃屋の仕出し弁当を注文しています。そのあと、午後一時から――」

移動中は、運転の妨げにならない程度にその日のスケジュールについて簡単に打ち合わせる。

通勤時間は二十分ほど。自ビルの裏手にある社員用の駐車場に車を停めて、建物の中へ。

この時間、会社の一階にあるホールは出勤してきた社員達で大いに賑わっていた。

（うーん、今日も視線がすごいなあ……）

毎度のことながら、ゆうちゃんと並んで歩くと周りの視線をビシバシ感じる。特に女性社員達からの眼差しが熱い。

何せ彼は大神グループ総帥の息子で、会社の重役。裕福で将来性はつちりな上、独身のイケメンだから、女性社員からの人気がすこぶる高いのだ。

元々存在感があるというか、人目を引く人であるゆうちゃんが現れると、みんな彼に視線を奪われる。

そして、いつも彼にひっついてる『血の繋がらない妹』の私に、厳しい目を向けるのだ。

小学校くらいまでは、主に男子達から捨て子であるということを利用していじめられていた私だが、

中学校に上がったところから、女子に攻撃されるようになった。

地元でも有名な大神家の美形三兄弟に可愛がられている血の繋がらない妹が気に入らない子が、とても多かつたのだ。

中には、私を懐柔して兄達に近づこうとする女の子もいたけれど、ゆうちゃんがそういうのをめちやくちや嫌がるため協力を断っていたら、私が兄達を狙っていると邪推されて、余計に敵視されました。

私はそのころからゆうちゃんに対する恋愛感情を自覚していたものの、だからって彼を狙うとか、恋人になりたいとか、そういう気持ちはない。

故に昔も今も、協力はできないが邪魔もしないというスタンスでいるのだけれど、私がゆうちゃんの傍にいるだけでも目障りなんだろうな。

それは社会人になった現在も変わらない。私、会社では兄を追ってコネ入社した金魚のフン扱いされているからね。

もちろんそんな人ばかりではないものの、大半の女性社員と一部の男性社員に白い目で見られている。

会社の人間には大神家の親戚も多く、どの馬の骨ともわからない私が、本家の娘として遇されているのが気に入らないって気持ちには、わからないでもない。

コネ……しかも超強力なやつを持っていることは事実だしね。

ただ、私はちゃんと他の社員と同じ入社試験を受けてここに入ったし、相応の努力はしてきたつ

もりだ。なんら恥じるところはない。

そんなわけで今朝も社員達の視線を浴びつつ、ゆうちゃんと共に役員専用のエレベーターに乗り込む。彼の執務室と秘書課は同じフロアにあるので一緒に降りて、ゆうちゃんと共に常務室へ。

そこで朝一番のコーヒーを淹れてから退室し、秘書課に向かった。

始業までまだ余裕があるこの時間、秘書課のオフィスには早めに出勤している人の姿がちらほらある。

「おはようございます」

挨拶をすると、大半の人が「おはよう」と返してくれる。けれど、一部無視する人もいた。

まあいつものことだしとあまり気にせず、私は自分のデスクについて、パソコンを起動する。

「大神さん、昨日頼んでいた資料はできているかしら」

まずはメールチェック……とソフトを立ち上げたところで、課長の宮崎紫乃さんに声をかけられた。

宮崎課長は御年四十八歳のベテラン秘書で、黒髪ショートカットがよく似合うキリツとしたキャリアウーマン。大神家の娘だからと私を贖済することも敵視することもなく、公平に接してくれる。部下思いで頼りになる、憧れの上司だ。

「はい。ファイリングしてこちらに……」

(あれ?)

私は昨日退勤前に仕上げた資料を取り出そうと引き出しを開け、ふと違和感を覚える。

(ファイルの位置がずれてる?)

デスクの右袖にある一番下の深い引き出し。その奥側に差しおいたはずのファイルが、手前に移動していたのだ。

(誰かが一度取り出したのかな)

もしやと思い中身を確認してみると、資料はどこどころコーヒーか何かの染みで汚れ、文字が滲んでいる。こんな状態で課長に渡すわけにはいかない。

(もしかして……)

私は斜め向かいのデスクを使っている三つ上の先輩——さっき私の挨拶を無視した永松千夏さんに視線を向けた。

セツトに時間をかけていそうな巻き髪、勝気な顔に濃いめのメイクを施した彼女は、真つ赤な唇をニヤニヤと弛ませてこちらを見ている。

(……ああ、なるほど。はいはい。そういうことですね)

引き出しに入れておいた資料は、おそらく永松さんの手によって汚されたのだろう。

こういう嫌がらせは初めてではない。

永松さんはゆうちゃんを狙っている女性社員の一人で、私が秘書課に配属された当初は優しかったものの、彼との仲を取り持つよう頼まれたのを断つて以来、すっかり目の敵にされていた。

おまけに彼女がずっと希望していたという大神常務専属秘書の座まで私が奪う形になったものだから、敵意は増す一方。「どうせあんたも大神常務狙いなんですよ」「だから私の邪魔をするん

ですよ！」って、ある意味お決まりパターンの悪態を吐かれたこともある。

しかし、永松さんに限ったことじゃないけれど、本当にゆうちゃんの恋人になりたいと思うなら、一応は彼の妹である私に嫌がらせをするのは悪手だと思っただけだなあ。私がゆうちゃんに告げ口するとは考えないだろうか。

(もちろん、そんなことで彼を煩わせたくないからしないけど)

私はため息を吐きそうになるのを堪え、課長に謝罪した。

「申し訳ありません、課長。資料に汚れがあったので、印刷し直します。少々お待ちいただけますよろしいでしょうか?」

「ええ、かまわないわよ」

「ありがとうございます」

私はさっそく資料のデータを開いて、再印刷をかける。

結構な量があったが、最新式の複合機が高速でプリントしてくれた。

(一、二、三……)

ページや内容に抜けがないかを確認して、新たにファイリングしたそれを宮崎課長に手渡す。

「お待たせいたしました、課長。こちらをどうぞ」

「ありがとう。……うん、よくまとまっているわね。大神さんが作る資料はいつも見やすく、助かるわ」

ファイルを受け取った彼女は資料をチェックすると、にっこり微笑んだ。実年齢よりうんと若く

見える課長は、笑顔にも華がある。

「ありがとうございます」

尊敬する上司に褒められて、嬉しい。

去り際、宮崎課長はこっそり小声で「あんまり酷いようなら相談してね。私から言って聞かせるから」とも言ってくれた。永松さんと、その一派による嫌がらせのことだろう。

私は微苦笑を浮かべ、同じく小声で「ありがとうございます」と答える。

まあ今のところ、挨拶を無視されたり聞こえよがしに嫌味を言われたり睨まれたり、今朝みたいにちよっとした仕事の妨害をされるくらいで済んでいる。永松さんも大事にする気はないらしく、嫌がらせの一つ一つはささいなものだ。

こういうことには慣れているし、問題ない。というか、私を攻撃してくる分にはいいんだ。一番こたえるのは、私のせいで家族が悪く言われること。家族に迷惑をかけることだ。

昔から、捨て子である過去や養子である事実を理由にあれこれ言われてきたけれど、私は自分が謗られるより、私を引き取ってくれた家族が非難の的になったり、害される方が何倍も辛い。

実際、私のせいでゆうちゃんに怪我を負わせてしまったこともある。

忘れもしない。あれは、私が小学三年生の夏だ。

ある日突然、私の親戚を名乗る人達が家に来て、私を引き取りたいと言い出した。その代わり、金銭的に援助をしてほしいと。

実を言うと、そういう連中はこれまでもたくさんいた。

彼らは出自のはっきりしない私をダシにして、大神家から金銭を筆り取ろうとしていたのだ。

よく「宝くじに当たると、知らない親戚から電話がかかってくる」とか、「親戚が増える」と言うけれど、それと似たようなものだろう。

大抵は両親に追いつ返されてそれきり。

でもその中で一組だけ、諦めの悪い人達がいた。

彼らは援助を引き出せないことがわかると私を誘拐し、身代金を要求しようと考えたのだ。

なんでも、多額の借金を抱えた中年の夫婦だったらしい。彼らは大人達の目を盗んで私に接触、産みの親が会いたがっていると告げた。

『小春ちゃんを捨てたことを、今では心から悔やんでいる』

『せめて一目だけでも元気にしている姿が見たいと、いつも泣いている』
そう唆され、愚かにも私はその言葉を信じてしまった。

大人になった今でこそ「私の親は育ててくれた大神家の両親だけ」と割り切れているが、あのころは、実の両親に対する憧れ……というか、幻想をまだ捨てきれずにいたのだ。

彼らは何か止むに止まれぬ事情があつて、私を捨てざるを得なかったんじゃないか、と。

大神家を離れ、実の親と暮らしたいと思つたわけじゃない。ただ、血の繋がった家族がどんな人達なのか知りたかった。

自分が捨てられた理由を、親の口から直接聞きたかった。

そして私は、大神家の両親に知られたらきつと反対されるからという相手の口車に乗り、こっそ

りと屋敷を抜け出す。

しかし、私の様子がおかしいことに気づいたゆうちゃんが後を追ってきて、中年夫婦の車に乗り込もうとしていたところ引き止める。

中年夫婦は慌てて、無理やり私を連れ去ろうとした。それをゆうちゃんに邪魔されて激昂し、隠し持っていたナイフを振り回す。

『小春、逃げる！』

『ゆうちゃんっ！』

この時、ゆうちゃんは私を庇って右腕を切られた。

そのあとすぐ、騒ぎを聞いて駆けつけた大人達に取り押さえられて犯人が警察に捕まり、誘拐は未遂に終わる。結局、彼らは私の血縁でもなんでもなく、産みの親が誰なのかはわからずじまい。

事件後、家族は私の浅慮を叱り、けれど「小春が無事でよかった」と言ってくれた。特に母と祖母は泣きながら、「小春はうちの子だ。どこにもやらない」と言ってくれた。

怪我を負ったゆうちゃんさえ、「あんな連中の言うことをホイホイ信じるやつがあるか！」と怒ったものの、それ以上私を責めることはない。

……でも、私は申し訳なくてたまらなかった。

私が馬鹿なことをしたせいで、ゆうちゃんが怪我をした。

そもそも私がいたから、こんな厄介事が起こったんだ。

誘拐未遂の件だけじゃない。私がいなければ、両親が親戚を名乗る連中から度々お金の無心をさ

れることもなかっただろう。

自分のせいで家族に迷惑をかけたくない。

その思いは今も強く、私の胸に刻まれている。

(……といっても、未だに私のせいで色々言われちゃってるんだけど……)

ゆうちゃんが私を専属秘書に指名した時も、「公私混同しているんじゃないか」とか、「身内鼻息がすぎる」とか、陰口を叩かれていた。

だから私は家族がこれ以上悪く言われないよう、私を専属にしてくれたゆうちゃんの判断は間違っていないかっただんだと思ってもらえるよう、仕事で応えなくちゃ、もっと頑張らなくちゃと思っているのだった。

午前中の仕事をこなしているうちに昼休みになり、私は秘書課に届いたゆうちゃん用の仕出し弁当と参加者分のお茶を営業部のミーティングルームに用意してから、昼休憩に入った。

(うーん、今日は社員食堂で済ませようかな)

専属秘書とはいえ、四六時中彼の傍についているわけではない。今回のランチミーティングも同席しなくていいとのことだったので、今日の昼はフリーなのだ。

すると折良く、同期の友人から「よかったら、今日は一緒に社食でランチしない？」とお誘いのメールが届く。

私は快諾し、社員食堂前で友人と落ち合った。

「急にごめんね、小春」

「ううん。誘ってもらえて嬉しかったよ」

私にランチのお誘いメールを送ってくれたのは、人事部に所属している朝倉紗代。私は『紗代ちゃん』と呼んでいる。

彼女は綺麗な黒髪を一つに結び、赤いフレームの眼鏡をかけたモデル体型の美人さん。入社したばかりのころの研修で同じ班になって仲良くなった。

さっぱりとした気性の姉御肌で付き合いやすい彼女とは、予定が合う時にランチを一緒にしたり、飲みに行ったりもしている。

「小春、今日は何にする？」

「そうだなあ……。あつ、Aランチ美味しそう」

私達は社員食堂の入り口近くに掲示されたメニューを眺めながら、あれこれと相談し合う。

うちの会社の食堂は男性向けのがつつりメニューから女性向けのヘルシーメニューまで種類豊富でかつ美味しいので、こうして選ぶ時間も楽しい。

「うん、決めた。やっぱりAランチにする」

「そっか。んー、私もAランチにしようっと」

というわけで私と紗代ちゃんが揃って選んだのは、本日のAランチ。メインが大根おろしとツナのパスタで、トマトサラダ、フルーツゼリーが付いている。

自動券売機で食券を買い、カウンターに提示すると、ほどなく食堂のおばちゃんから料理が渡さ

れた。顔馴染みになっているおばちゃんは、「おまけだよ」と言つてサラダのトマトを一つ増やしてくれる。

トマト好きだから嬉しい！ ありがとう、おばちゃん。

紗代ちゃんと二人、「得したね」「ね」と笑い合い、食堂の奥にある二人掛けのテーブルに向かい合せて座った。

(……ゆうちゃんは今ごろ、料亭の仕出し弁当を食べながらランチミーティング中かあ)

手を合わせて「いただきます」と口にする。その瞬間、ふと浮かんだのは、昼休みにも仕事をしている彼のこと。

(そうだ。あとでゆうちゃんにお弁当のどのおかずが美味しかったか聞いて、家でも作ってみようかな)

プロの味には敵わないまでも、彼が喜んでくれる料理のレパートリーを増やしたい。

そんなことを考えつつパスタをフォークで巻いていると、トマトサラダをついていた紗代ちゃんがニヤけた顔で「あんた、また大神常務のこと考えてるでしょ」と言い出した。

「うっ」

紗代ちゃん、鋭い。

「離れていても、あんたの頭の中は常務のことではないのね。秘書の鑑たわ」

もっとも、仕事だからってだけじゃないでしょうけど、と紗代ちゃんは含み笑いを浮かべる。

「そ、そんなことは……」

……なくもない、です。はい。

実は紗代ちゃんには、私の気持ちを知られている。

以前、二人きりの飲み席で酔っ払い、ゆうちゃんに対する長年の恋心をうっかり打ち明けてしまったことがあるんだ。

それまで誰にも話せなかった想いを、彼女は親身になって聞いてくれた。

今日みたいに時々からかってくることもあるけれど、私にとって紗代ちゃんは数少ない心許せる友人であり、貴重な相談相手だ。

「もう、告白しちゃえばいいのに。あの人だって、まんざらでもないと思うわよ？」

周りの席が空いていて、聞き耳を立てている人がいないからだろうか、今日の紗代ちゃんはぐいぐい踏み込んでくる。

「……前にも言ったけど、そんなつもりはないの。今の関係を壊したくないし」

私達はあくまで兄妹。上司と部下にはなれても、恋人にはなれない。

そもそもゆうちゃんは私を女として見ていない、つまりは恋愛対象外なのだ。想いを告げたとて困らせるだけ。

「そうは言うけどさあ、この先どうするのよ。先月、二番目のお兄さん——雅斗さんだっけ？も結婚して、次は常務の番だって、彼狙いの肉食女子達が騒いでたわよ。親戚だつてうるさいんでしよう？ 常務だつてもう三十超えてるし、縁談とか来てるんじゃないの？」

紗代ちゃんの言う通り、数年前に結婚して今は二人の子どもがいる長兄に続き、次兄のまさ兄

も最愛の人と結ばれた。ちなみに長兄の晴斗——はる兄はグループ内の私達とは別の企業で副社長、まさ兄も長兄と同じ会社の専務取締役を務めている。

「縁談は、実家にたくさん来てるみたいだけど……」

まさ兄の結婚が決まって以来ゆうちゃん宛での縁談が増したつて、実家の母がぼやいていたつけ。大神家、それも本家の子息と縁づきたいつて人達のターゲットが、唯一の独身となったゆうちゃんに集中しているのだ。

先日出席したパーティーで彼がやたらと女性達に囲まれたのも、そのせい。

「ただ、うちは祖父母も両親も、子どもに政略結婚はさせたくない、結婚相手は本人に決めさせるつて考えの人だから、断っているみたい。ゆうちゃ……大神常務も、今は仕事が忙しくて結婚どころじゃないつて言ってる」

……でも、いずれはゆうちゃんも誰かと結婚することになる。

そうなった時、今までみたいには彼の傍にいられなくなると、紗代ちゃんは心配してくれているのだ。

わかっている。兄妹とはいえ、血の繋がっていない女が熟知り顔でゆうちゃんにひっついていたら、お相手の女性が気を悪くするものね。

当然、同居は解消となり、私が今やっている彼の身のお世話は、妻になる人に委ねられる。私達が今後も家族で、兄妹であることに変わりはないけれど、距離は今よりも確実に遠くなるだろう。

「……………」

想像しただけで胸がきゅうつと締め付けられる。でも、仕方のないことだ。

「小春……」

「……大丈夫。私も、この先のことはちゃんと考えているの」

まさ兄の縁談が決まったあたりから、私は将来のことを強く意識するようになっていた。

(もし、ゆうちゃんが誰かと結ばれたら……)

その時には、彼の傍を離れようと思っている。

だって、大好きな人が別の女性と幸せな家庭を築くところを間近で見続けるのは辛い。きっと、平静ではいられなくなる。

だから、ゆうちゃんの結婚を見届けたら地方の支社に異動願いを出して、東京を離れようかなと考えていた。

物理的に距離を置き、時が経てば、この不毛な恋心や彼への執着も、薄れてくれるのではないだろうか。

(もし私が女じゃなくて、男だったら……)

血の繋がらない兄に報われない想いを抱くこともなく、弟として、家族として、彼の傍に居続けられたのかなあ……

ふと、詮無いことを考えてしまう。

二十五年前、森の中で拾われてからずっと一緒にいてくれたゆうちゃんと離れるのは寂しい、悲

しい、辛い。本当は、離れたくない。

遠からず訪れるだろう別れを覚悟しなくちゃと思うのに、未練を断ち切れない。

(……ああ、だめだなあ。こんなだから、紗代ちゃんにも心配をかけちゃうんだ)

決して告げるのできない想いの終着点は、自分の心の中にしかない。

自分で消化するしかないんだと言い聞かせて、私はフォークに巻きつけたパスタを口にす。ポ
ン酢の染みた大根おろしの爽やかな酸味が、口いっぱいに広がった。

「おろしパスタ、美味しいね。夏にぴったり」

「……もう九月だけどね」

紗代ちゃんはそう苦笑して、自身もおろしパスタを食べる。私がこの話題を切り上げたがっているのを察してか、それ以上はもうゆうちゃんの件に触れることはなかった。

(ありがとう、紗代ちゃん)

昼食を終えた私は、紗代ちゃんと別れ秘書課に戻る。

すると、宮崎課長にちよいちよいと手招きをされた。

「大神さん、ちよつといいかしら」

なんでも専務が私を呼んでいるらしく、すぐ執務室へ向かうようにと伝えられる。

(専務が……?)

うちの会社の専務取締役——大神栄司は祖父の末弟で、私達兄妹にとっては大叔父にあたる人物

だ。年齢は確か……祖父よりも父に近い六十四歳。

現在、我が社の社長と副社長のポストには一族の外の人間が就いている。そんな状況、大神家の血を引く自分の上に一族の外の人間が立っていることが気に入らないようで、大叔父は反社長・副社長の派閥を作り、何かと対立していた。

社長も副社長も父が信頼している、とても優秀な人達なんだけどね。

ちなみにゆうちゃんは社長・副社長派。専務派の陣営くみに与しているのは、主に大叔父のコネで入社した分家の人達だ。

まあ、とにかく大叔父はそういう考えの人で、どこの馬の骨ともわからない捨て子の私のことも昔から蛇蝎だかつのごとく嫌っていた。

そんな大叔父からの呼び出しとか、正直とても気が重い。

なんだろう。勤務態度が悪いとか礼儀がなっていないとか、難癖なんひびをつけられ嫌味&お説教コースかな……。過去にも何度かやられたことがあるんだよね。

専務にも専属の秘書がいるし、呼び出される用件の心当たりなんてそれくらいしかない。

(気が重いなあ……)

とはいえ、上役からのお召しを断るわけにはいかず、私は専務の執務室に向かった。

重厚な扉をノックして、「大神小春です」と声をかける。

すると一呼吸置いて「入りなさい」と応えがあった。私はいつも以上に所作しよまに気を配りながら入室する。大叔父の前で下手な立ち居振る舞いを見せると、嫌味が倍になるからね。

「おお、小春。急に呼び出して悪かったな」

(えっ！)

ところが予想に反し、大叔父はにこやかに私を迎えた。

詫びの言葉をかけられるなんて初めてで、つい動揺が顔に出る。

「い、いえ、お気になさらず」

私は慌てて平静を装い、「それで、ご用件は？」と尋ねた。

「小春、フジヨシ・コーポレーションという会社は知っているな？」

「はい」

東京に本社を構えるフジヨシ・コーポレーションは、元は江戸時代創業の紙問屋で、現在は紙製品の製造と販売を行っている、業界大手の企業だ。昔からうちのOA機器を使ってくれているお得意様で、重要な取引先の一つでもある。

「先日、フジヨシの御曹司が我が社を訪れたことがあったろう」

「ええ」

OA機器部門は専務が担当していて、対応したのも大叔父のだけれど、ゆうちゃんと私も挨拶あいさつさせてもらった。

その時初めて対面したフジヨシの御曹司はゆうちゃんより三つ上の三十四歳で、優しげな顔立ちをした、感じのいい男性だった覚えがある。

しかし、その彼が今回の呼び出しにどう繋がるのか。

話の行方がわからず戸惑う私に、大叔父は予想外の言葉を放った。

「どうもな、その時に彼が、お前を見初めたらしい」

(……えっ、えええっ……!)

み、見初めた……？ 私を……!?

驚きのあまり表情を取り繕うのも忘れて、私はぼかんと呆ける。

「あちらは、お前の生い立ちも全て承知で縁談を持ちかけてくださっている。なあ、小春。お前のような人間にはもつたいないくらいの話だと思わないか？」

大叔父は言葉の端々に私への嘲りを滲ませ、ニヤニヤと上機嫌に笑った。

「藤吉家と縁を結べれば、会社にとっても大神家にとっても大きな益となる。血の繋がりのないお前を今日まで育ててくれた両親に、恩返しができるぞ」

(そんなこと、急に言われても……)

自分が結婚するなんて考えてもいなかった。まして、私と結婚したいという人が出てくるなんて、思いもしなかったのだ。

いずれゆうちゃんが結婚したら、距離を置かなくちゃと思いつくばかりで……

(……でも、そうか。私が先に結婚して、ゆうちゃんから離れる選択肢もあるのか……)

正直、一度会っただけの男性に愛情を持てるようになるかは、わからない。

ううん、たとえ相手が誰であっても、彼以上に好きになれる気がしない。

けれど会社や家のための結婚なら、家族やゆうちゃんの役に立てるなら、耐えられるのではな

いか。

「……り」

(いや、でも、やっぱり急な話すぎて……)

「とにかく、来週の日曜日に見合いの席を設けたから、必ず来るように。詳細はあとで伝える」

黙りこくった私に焦れたのか、大叔父は苛立ちを滲ませてそう言い放った。

「えっ」

(来週の……って。もう日にちまで決まっているの?)

相手は取引先の人だし、そこまで話が進んでいては、とても断れそうにない。

「ああそうだ。この件はまだ内輪だけの話だからな、本決まりになるまで口外はしないように。家族にも、もちろん勇斗にもだ」

「……わかり、ました」

結局私はその場では頷くことしかできず、用は済んだとばかりにシッシと手を振る大叔父に一礼して、執務室を後にしたのだった。